

KOBE MARATHON 2023

走る喜び、達成感を共に



石飛 肇さん(69)＝神戸市須磨区
裕也さん(41)＝神戸市垂水区
菜々美さん(21)

神戸生まれ、神戸育ちの家族3世代でそろって神戸マラソン完走を目指す。トライアスロン歴36年になる肇さんが、息子の裕也さんと孫の菜々美さんに「一緒に走ろう」と声を掛け、「祖父の夢がかなった。」

家族3世代、神戸マラソン完走目指す そろいのウェアで地元満喫

菜々美さんは現在、神戸松蔭女子学院大の3年生。走る競技で大会に出場すること自体が初めてという。肇さんは「新型コロナウイルス禍で制約が多かった大学生生活の思い出にしてほしい」と目を細める。菜々美さんは「少し不安もあるけど、完走したい。」



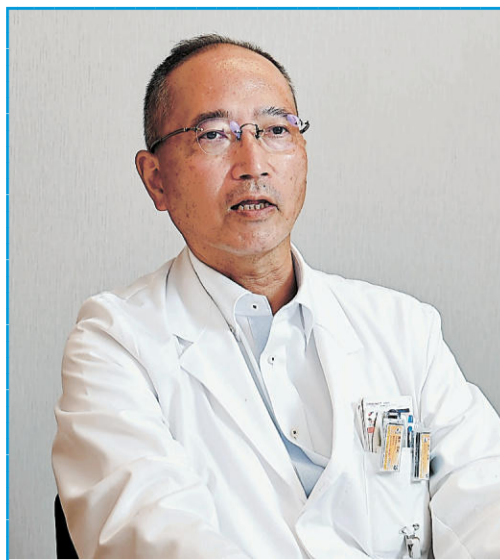
全日本トライアスロン宮古島大会で駆け抜ける石飛肇さん(2019年、沖縄県)

自営業の裕也さんは、これまで神戸マラソンを2度完走している。「今回も、けがをせずに規定時間内にゴールするのが目標」と控えめだが、「土地勘があるのでコースは走りやすい。ゴール終盤の神戸大橋を振り返ると、遠くは塩屋や舞子まで、走ってきた市西部の風景が目に見え、心でくる。あの感動を三たび味わいたい」と思い入れは深い。

肇さんは現在、神戸市須磨区内でトライアスロンの初心者や障害者向け教室を主宰し、兵庫県トライアスロン協

公益財団法人甲南会
甲南医療センター 参事 (循環器内科)

清水 宏紀さん



清水さんは昨年の神戸マラソンにランナーとして出走中、倒れているランナーを発見し、救命処置に当たるといふ経緯をした。場所は、山陽電鉄東垂水駅に近い15・5F地点。すでに医療スタッフの胸骨圧迫(心臓マッサージ)処置を行っていた。心停止状態であることは明らかだった。「循環器の医師であることを名乗り、まず自動体外式除細動器(AED)と救急車の手配を周囲の方をお願いした」という。

昨年は救命処置で「名誉のリタイア」 皆と事故無く完走を目指す

清水さんは神戸マラソンに以前、医療スタッフとしても参加したことがある。「神戸マラソンでは5時おきに救護所があつて医師、看護師が配置され、AEDはコースに200台設置されており、安心して走ることができる大会。ただ、医療スタッフが到着するまでの間、いかに適切な処置ができるかで救命度は変わる」「ランナーや治道の方が見つけ、倒れた人を見つけたら、すぐに救命処置に当たる勇気を持つてほしい」と呼びかける。



救命救急の功勞として、垂水消防署と神戸マラソン実行委員会から感謝状が贈られた清水宏紀さん(中央、昨年11月)

カステラ食べて終盤走り切って

今年の神戸マラソンでは、スポーツ選手向けのカステラ2千個が補給食として用意される。ゴールまであと10キロ余りに迫った30キロ付近。企画・開発したのは「たまごやさん」のアスリートたち。「終盤の『走者泣かせの坂』を前に、消化・吸収のよいカステラでエネルギー補給を」と言い、当日も給食所でランナーに声援を送る。



「CASTELLA」の個包装のパッケージには、「FIGHT」や「リラックス」などの応援メッセージが

「たまごやさん」のアスリートら開発

高砂市で鶏卵の生産・加工販売を手掛ける「籠谷」の「+CASTELLA(プラス カステラ)」。

原材料の卵は、同社養鶏場で育った「奥丹波の卵」。吸収速度の異なる糖質を摂取できるように、ハチミツにも含まれる天然糖質「パラチノース」や砂糖など複数の糖質を使用して、シンプルな配合で仕上げた。形は卵をモチーフとした食べやすい一口サイズ。個包装のパッケージに応援メッセージも添えた。

管理栄養士の資格も持つ女子400名障害の横田華恋選手は「アスリートが『あったらいいな』と思うこだわりの商品を何度も試作して作った。多くのランナーに手渡し、応援できる機会をもらえてうれしい」と喜

30キロ付近で2千個提供



アスリートの補給食として新開発したカステラのこだわりをアピールする横田華恋選手(左)と中野瞳選手

ふ。今年6月の発売以来、選手たちが試合会場などで宣伝・販売。スポーツ関係者はもちろん、「子どもや高齢者、受験生に渡したい」と反響が広がり、購入が想定を上回っているという。

「KAGOTANI陸上競技部」は、同社が創業100周年にあたる2021年に設立。兵庫ゆかりの8人が所属し、今年9月の全日本実業団対抗陸上競技選手権大会では団体総合で優勝した。女子走り幅跳び日本高校記録保持者の中野瞳選手は「これからも地域に根差したチームとして幅広く活動したい」と話している。

